

明治十年代における日本人のベトナム認識について

大 沢 一 雄

陸軍大学の教官であった引田利章の「安南史」が陸軍文庫の一冊として出版されたのは一八八一年（明治十四年）のことであった。

その序に執筆の目的について次のように記している。

……蓋シ安南上世ヨリ今ニ至ルマテ其治乱成敗開明ノ遅速諸王ノ名号及ヒ各世政事事実ノ尤モ著大ナル者ヲ取リ以テ之ヲ今日ニ知り易カラシメント欲スルナリ拮据数年其煩勞ヲ顧ミス稍ク其功ヲ竣ヘリ蓋シ乃チ世ノ公益タラスト雖トモ亦以テ其志ヲ為スノミ若シ夫レ世ノ史誌ヲ好ミ特ニ安南国事ヲ涉獵セント欲スル者ノ為メニ萬一ヲ裨補スルコトアラハ則チ固ヨリ亦其望ム所ナリ 紀元千八百七十四年編者識

これによれば、この「安南史」の執筆は出版年次を数年さかのぼることは間違いなく、少なくとも明治六年のフランス海軍大尉フランス・ガルニエ F. Granier のトンキン経略、更に翌七年の阮朝によるコーチシナのフランスに対する割譲という経緯をへて、いわば歴史的転換期にあったベトナムへの関心を核として成立したものと想像して差支えあるまいと思われる。

更に彼は「安南全図」等を出版しているが、明治十七年十月にはベトナム史の基本的史料ともいうべき「大越史記全書」を活字にしている。現在でもベトナム研究者でこの出版によって恩恵を受けぬ者はないでめろう。

又、この「全書」の出版されたと同じ年に岸田吟香により「安南志略」が世に出た。これは十三世紀に元に投降したベトナム人黎崱によって書かれたもので、現存するベトナム史書として最古のものでめる。

このように明治十年代にあいついでベトナムに関する出版が行なわれ、日本におけるベトナム研究の端著が開かれた事は注目に足ることといえる。

昭和十五年（一九四〇年）九月の日本軍の北部仏印進駐あたりを契機に日本の南方に対する関心は非常に昂まり、南方諸国の歴史、経済等に関する出版物はまさに汗牛充棟ともいえるブームを現出したが、その殆んどが外国学者の研究や業績の翻訳であったり、一般向けを狙った粗末な内容のものにすぎず、坂本徳松氏の表現をかりれば「専門的研究書としては松本信広『印度支那民族と文化』（一九四二年）があげられるのみである。」

南方と直接かかわりをもち、該地域への軍事的進出の企てられた時代にあつてすらベトナム史の基礎史料の出版が計画されることもなく終ってしまったことを思う時、我々は引田利章や岸田吟香の先駆的業績に敬意を表さざるをえない。

又、それと同時にこの明治十年代におけるベトナムへの関心が何故おこったか、ここでもり上った気運が何故スムーズなベトナム理解へと発展することなく挫折してしまったかという点について考えてみたいと思う。

まず、この時期にベトナムへの関心をかきたてた最大の原因として明治十七年に勃発した清仏戦争を挙げるべきでめることは論を俟たない。

同年八月二十六日の東京日日新聞は同月二十三日におけなわれたクールベール提督 Courbet の福建船政局に対する

砲撃のニュースを伝え、その中で、

……尤も清艦隊は寡数と云ふ。とても仏国艦隊の好敵手にはあらざるべしと陰かに思い居たる所なるが、斯程の大敗あるべしとも思いよらず、手初めの戦争に軍艦の七艘も沈められしは清国の鋭氣も定めし挫折せしめられしことなるべし、我々も局外ながら此報をきき汗の滴る此酷暑にもゾッと寒氣を催したり。

と云っている。

一般国民がこの戦争に対して抱いた理窟ぬきの危機感というものを、我々はこの記事からも推察することが出来る。

しかし、この戦争を通して生まれた日本人のベトナムへの関心が、決して単純な危機感にのみ終るものでなかったことにも注意する必要がある。

少なくとも、この戦争が次の二種の関心を惹起したということが出来るのではあるまいか。こ一つは、この戦争に乗じて永年に亘り懸案事項となっていた朝鮮問題の解決しようとする、主として外交的な関心である。

これが純政治的立脚点からベトナム問題をみていこうとするのに対し、第二のものはベトナム問題をそれ自体として観察していこうという立場である。

ヨーロッパの軍事力に圧倒併呑されたベトナムの運命の中にアジア全体——日本をふくめて——の危機を予見し、ベトナム問題に対する研究を通じてその危機を回避する方途を見出そうとする意図が、この第二の立場を強く貫ぬいていたということができよう。

もちろん第一の立場も第二の立場も、ともにヨーロッパ諸列強の圧倒的優位と日本の地歩の国際社会における不安

定さに対する認識において異なるものではないが、夫々の立場の志向するものは全く背離せざるを得ない。

特に前者の場合にあって、日本は清国の朝鮮における支配権の打倒という目的のため、ベトナムにたいしては侵略国という立場に立つフランスへ接近するという政策を採らざるを得なくなってくる。

当時日本は朝鮮進出の機会を窺い、朝鮮に対して宗主権を主張する中国との間に鋭い緊張関係を醸成しつつあった。

既に、明治十五年（一八八二年）の所謂壬午の軍変において日本の朝鮮進出策は朝鮮民衆により手痛い反撃を破っていたが、更に日本にとって重要なことは、この軍変によって清国の朝鮮に対する干渉を招く機会を与えたことだった。

同治の中興により比較的定期にめった清朝は、これを機に袁世凱を朝鮮に遣わし、この軍変の黒幕的存在であった大院君を捕へ清国に送り、閔氏政府を再建し、更にこれと「商民水陸貿易章程」を結び、朝鮮に対する宗主権を確認せしめることに成功したのである。

これに反して日本は済物浦条約により事態の收拾に成功し、一応対外・対内的な面子を保つことは出来たが、実質的には朝鮮における主導権争いにおいて清国のために一步後退し、静観することを余儀なくされたのである。

かかる時期に清国とフランスと間でベトナムをめぐる対立が表面化したのであるが、この衝突にあっても清国の朝鮮におけるごとく、ベトナムにおける清国の宗主権の問題が大きな係争点になったのである。

邵循正は⁽³⁾この点について次のようにのべている。

中越民族文化關係綦切，溯其原委，遠及秦漢。自漢迄宋皆為中国郡県，迨後脫離中国自立，仍世世受封為属国。

其地北界滇奥，与中国接壤数千里，呼吸相通，為中国南境之保障，若指之於臂，唇之於舌，地位与朝鮮相同，史

籍具存、可資覆按。法国（フランス）既覬覬北圻（トンキン地方）、乃謀先破壞中越之宗藩關係。法之說者異口同声、擯斥中国在越南之宗主權、指為有名無実。……中越之宗藩關係、其歷史根柢至為充足、不生疑問。故即此輩亦不敢以強詞抹殺。至於嚴格之法律問題、以時代精神之不同、中西觀念之異趣、当然与近日歐西之國際法不能不有衝突。若以此遂謂中越之宗藩關係為有名無実者、實不公之甚者也。按列強欲取中国藩屬、其第一步、常先設法否認其与中国之歷史上法律關係、如出一轍、竟成定例。

邵循正は宗藩關係が近代國際法の概念とは一致しないものがあることを認めつつも、中国とベトナムの長期に亘る歴史的關係を根柢として一挙に宗藩關係を否定することに対して強い反撥を示している。

又、同時に彼は宗藩關係を否認する列国の政策の裏面に強い侵略の意図を見出し、引用は省略するが、フランスのベトナムに対する、日本の琉球、朝鮮に対する、更にイギリスのビルマに対する侵略が常にそれらの地域に対する清朝の宗主權の否認にはじまったことを指摘している。⁽⁴⁾

この邵循正よりも更に強く伝統的宗主權の合法性を信じていたであろう、当時の清朝の官人階級にとって日本やフランスの主張は許し難い暴論として映じたであろう。

しかし、宗主權問題は日本人にとっては清国の朝鮮干涉を正当化する便宜的なものとしてしか理解されなかった。そればかりでなく、自由民権論者の一部の者にとって清の朝鮮に対する干涉は自由と正義の名において非難さるべきだったのである。

時代はややくだるが、大阪事件の際、朝鮮に撤布する目的で起草された「告朝鮮自主檄」⁽⁵⁾は当時の民権論者の感情を卒直に示している。

……（清人）嘗与仏人争越南，血刃鋒頓，罔攸懲創，益干預朝鮮内政。是可忍，孰不可忍也。我徒常以自由大

義、立天下、所痛憤慷慨、不能自己也。

征韓論にやぶれて下野した板垣等にはじまる自由民権の主張は今や藩閥政府に反対する手段としてでなく、清国の朝鮮干渉を非難し、日本の国権伸張のための理論として利用されたのである。

この民権論者たちの自己撞着ともいえる変貌については茲では論じないが、彼等が若し虚心に「自由、大義をもって天下に立つ」て江華島条約以降の日本の朝鮮進出をみたならば、果して日本に清を咎める資格ありと断じ得るであらうか。

しかし、孰れにしても、かかる立場からすればフランスによって侵略を被っているベトナムに対して同情するよりは寧ろベトナムに対して不法な宗主権を主張する清朝と戦うフランスに日本人が接近しようとするのは当然であらう。伊藤博文、井上馨、後藤象二郎、福沢諭吉等、朝野の指導層が清仏戦争に際し、これを奇貨としてフランスと結び日本の国際的地位の向上とともに、日本の朝鮮支配の安定化を策したのはこの点からみて極く自然であったといえよう。⁽⁶⁾

かかる清仏相争う状態を背景として勃発したのが、明治十七年（一八八四年）十二月の甲申事変であった。結果として甲申事変は失敗に終り、日本は予期せる成果を挙げえざるのみならず、かえって清国の朝鮮支配を更に強固なものにするという逆効果を生んだ。

これに反して、翌明治十八年（一八八五年）六月九日、フランスは清国と天津条約を結び、ベトナムに対する保護権を承認させることに成功した。これらの一連の事態が朝鮮問題に深く介入していた福沢諭吉に大きな挫折感をもたらしたのであろう事は想像に難くない⁽⁷⁾

同じ年に彼が執筆した「脱亜論」はこのような挫折感の所産であったといえよう。

ここで彼は次のように論じている。

我輩をもってこの二国（中国朝鮮を指す）を視れば、今の文明東漸の風潮に際し、とてもその独立を維持するの道あるべからず。幸にしてその国中に志士の出現して、まず国事開進の手始めとして、大いにその政府を改革することわが維新のごとき大挙を企て、まず政治を改めて共に人心を一新するがごとき活動あれば格別なれども、もしもしからざるにおいては、今より数年を出でずして亡国となり、その国土は世界文明諸国の分割に帰すべきこと一点の疑いあることなし。……

されば今日の謀をなすに、わが国は隣国の開明を待つて共にアジアを興すの猶予あるべからず、むしろその伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那朝鮮に接する法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人がこれに接するの風に従つて処分すべきのみ。悪友と親しむ者は共に悪名を免かるべからず。われは心においてアジア東方の悪友を謝絶するものなり。」

ここにおいて「わが国は隣国の開明を待つて共にアジアを興すの猶予あるべからず」と断定するに至った福沢の念頭に甲申事變の失敗とベトナムの保護国化という歴史的な事実が大きな比率を占めて去来していたであろう事は執筆の時期から考えても否定できまいと思われる。

福沢は脱亜という方向を志向したが、これは福沢のみならず、この期における国権拡大論者一般の気持を代表するものであったろう。

この段階にあって、朝鮮問題とのかかわりにおいて注目されたベトナム問題について顧慮する余裕のあろうはずがなかった。

少なくともベトナムの運命にとり組み、ベトナム研究のために手がかりとなるような仕事は全く残されていない。

次に、第二の立場、すなわち朝鮮問題とかかわりなくベトナム問題そのものを考察しようとする立場について述べてみよう。これは既述のようにベトナムの運命と日本の運命とに対する或る種の連帯感を基調としているといえよう。もちろんこの立場といえどもはじめからベトナム研究を志向するものではなく、恐らくは清仏間の安南問題に対する時事的な関心に端を発したものであろう。

海軍大尉曾根俊虎の「法越交兵記」や明治十六年から十七年にかけての「東京日日新聞」紙上の安南問題に関する多くの論説はこの意味で国民の関心をこの方面に据えるための啓蒙的役割を果たしてきたというべく、この意義を過少評価すべきではないであらう。

しかし、時事的関心というものはあくまでも一時的関心にすぎない。

この時事的関心を昇華して歴史的認識にまでたかめるといふ炯眠の士が現われない限り第二の立場というものが生まれてくることはできない。

かかる炯眠の士として引田利章と岸田吟香の二人を挙げられると思う。

既述のごとく引田は陸軍大学の教官であり、岸田は当時樂善堂を經營し、中国を舞台とする商業に従事しつつあったが、嘗ては、東京日日新聞の福地減一郎らと名を齊しくするジャーナリストとして知られた人物である。

経歴からおして彼らのベトナムに対する関心のよってきたところは、はじめは時事問題にあったと考えてよからう。

岸田は安南志略を活字版として公刊するにあたり次のような序を寄せている。

綜一国之古今政治人物山川風俗而記載之、其惟志乘乎、蓋志猶史也、所以備掌故而資經濟者。……因念方今法越有事、必有留心經濟之士、欲得而先睹為快者、為亟付聚珍印行、以公海内云爾。

時事から端を発しながらもそれに止まらず、歴史・風俗・地理に至る広い認識のもとに有為の人士の手によって経済に資することのあるを期して安南志略を公刊した岸田の意図が簡明に示されているというべきであろう。

引田が明治十七年に大越史記全書を刊行したのも直接的には清仏戦争の影響である。

このことは同書に対する引田の序文によって明らかである。

しかし、引田は既にのべたようにベトナムについて早くから関心を抱いており、日本人として最初のベトナムの通史たる「安南史」を著わしており、岸田の場合と異なりベトナム史に対する知的欲求は更に強いものがあつたといえよう。序に

……我日本嘗同文軌者為支那為朝鮮為安南・支那朝鮮於我有舊好・而安南古或有我船舶至其国者・蓋西辺商估以財貨往来耳。末嘗聞有士人入其国察風土之槩者、独有阿倍仲麻呂遇颶漂泊之事、自後寥寥無聞。是以学者亦莫能通其史焉。頃者余得大越史記全書讀之。自鴻龐首御其国、經趙佗乘秦之乱奄有嶺表、前後四千余年其間治乱興廢政事人物悉莫不備其蹟。於是始知安南有全史矣。

とあるのをみても彼がベトナム史そのものに対し抱いていた強い興味を察することができる。これははじめに引いた「安南史」の序文からも知られるところである。しかし、又、それと同時に日本と同文の国として支那・朝鮮・安南を並列的に挙げていることにも注意すべきであろう。

ここに同文からする一つの親近感、もしくは連帯意識とでもいうべき感情の存在することを私は認めたいと思う。あるいは私のこの主張をもって独断的と考える人もあると思うので、同じく大越史記全書に寄せられた東京大学教授川田剛の序文のうち漢字の問題について触れている部分を引用して補ってみたい。

安南与暹羅地相近也、風土相似也、疆域人口相若也。而安南削弱為仏人所制。暹羅則物饒政举、頗致富庶。論

者求其故不得，乃曰安南用漢字，通觀字內，凡用漢字之邦委靡不振。嗚呼果如其言則印度既亡，暹羅何以用其字，羅馬既亡，歐米各國何以用其字。蓋嘗考之，國勢之振不振，在乎自強与倚人，自強者畜財鍊兵，事主実効。

倚人者籍力大国，務張虚威。安南古称交趾，建国尤舊，而兩漢以還入貢，受冊封襲為恆例，近世仏人通商設埔頭，一旦開釁逐清国戍兵，一戰克東京，再戰取諒山，王位廢置權在其手，外援之不可恃如此。昔者我幕府与安南暹羅書聘往来，商民移住暹羅者漸成聚落，号曰日本街，有山田長政者焉，智略過人，及暹羅被寇請援，率我衆力戰立功，遂掘其地，当是時彼国不用漢字，而削弱甚於安南何哉，亦恃外援不能自強也。

川田がここにおいて力説していることは国力の衰退は漢字を使用することに原因するものではなく、外援をのんで自強の努力をしないところにあるということである。

今日の我々からみれば当然のことで、わざわざ序文に寄せていう程の必要はないと思われるが、反面当時一般に漢字使用国は衰運をまねかれ難いとするような考えが流布していたことを裏付けているといえる。

引田が、日本、支那、朝鮮、安南をもって同文であるという時、かかる一般の俗説を真に受けたとは考えられないが、少くとも漢字をもって結ばれた一つの運命的な共同体意識をもっていなかったとはいえないであろう。

仮りに、このような連帶意識が全く存しないとするならば明治十七年という事点において大越史記全書を刊行する必然性は失なわれてしまうのではないか。

同じく序文で引田は

近仏闌西頻交涉安南国事，終与支那為釁隙，兵連而不解，余於斯書竊有所慨矣。遂命活刷頌之同志云。

といっているが、これによっても引田の大越史記全書の刊行が知識としてベトナム史に対する関心だけに終るものでないことが知られよう。

以上のことからベトナム問題に対する第二の立場というものが、第一の、いわば脱亜の方向とは逆に、アジアに対する連帶的感情を基礎とする、所謂大アジア主義といわれる方向を志向していたといえよう。

福沢の脱亜論の執筆されたと同じ明治十八年、樽井藤吉は「大東合邦論」を著し、日韓の対等合邦して西洋の侵略に対処すべきことをといた。

岸田や引田にあつて、このような連帶思想がどの程度まで自覚されていたかはわからないが、彼らは日本のすすむべき途を脱亜でなく、樽井と同じ方向に見出そうとしていたと推断して誤りはないのではあるまいか。

彼らの業躍は継承、発展されることなく終つたが、明治十年代のベトナム研究が、日本の自体の将来の存亡も定かに予想しえない、激しい帝国主義の波の中でアジア諸国との連帶の意識にはぐくまれて一時的とはいえ開花したことはまことに意義深いものがある。

しかし、明治二十年代のはじめに、アジアで最初に憲法と議會をもった日本は近代国家としてますます脱亜の傾向をつよめた。

特に日清戦争の勝利は一般には脱亜論の決定的勝利を証明するかのごとく受けとられた。そして、この頃から脱亜論も大アジア主義も実質的に一元化し国権伸張にともなう、日本の対外進出の隠れみのともいうべき役割しか果しえなくなつた。

日露戦争後、ベトナムの民族主義者潘佩球によって東游運動がすすめられ、在日ベトナム人は著しくその数を増したが、亡国の民に対する一般国民の関心は非常に冷淡なものであった。

況んや、その歴史に注意するものなどあろうはずがなく、明治十年代にみられた情熱は再び甦えることはなかったのである。

日本人のベトナムに対する関心の推移の中に近代日本の辿った厳しい政治的過程の反映をみようとするのは果して行きすぎであらうか。

注 (1) 「アジアアフリカ研究入門」Ⅲインドシナ研究入門 一七八頁

(2) 商民水陸貿易章程は八カ条よりなるが、前文に「此次所訂、係中国優待属邦之意、不在与各国一体均霑之列。……他国不得援以为例」とあり、「中国が属邦を優待するの意に係る」と明記されている。

(3) 邵循正「中法越南關係始末」三七頁・緒論(下) 中国与越南之宗属關係問題、国立清華大学 民国二十四三月

(4) 同 右 三七～三八頁

(5) 「自由党史」(下) 岩波文庫版 一三四～三五頁

(6) 彭沢周「清仏戦争期の日本の対韓政策」史林第四三卷第三号 一九六〇年五月

ク 「フェリー内閣と日本」 史林第四五卷第三号 一九六二年五月

(7) 現代日本思想大系九卷「大アジア主義」三八頁～四〇頁